HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ヤロスラウ・フリツァク著『故国の預言者 ： フランコとその周辺（1856-1886）』
Author(s)	島田, 智子
Description	書評
Citation	スラヴ研究, 55, 281-286
Issue Date	2008
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/39245
Type	departmental bulletin paper
File Information	55-011.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

［書評］

ヤロスラウ・フリツァク著『故国の預言者：フランコとその周辺（1856–1886）』[1]

島 田 智 子

ヤロスラウ・フリツァク Ярослав Грицак（1960–）は、『ウクライナ史概略：近代ウクライナ・ネイションの形成：19–20 世紀』[2]（1996）等の著作で知られるリヴィウ大学の歴史学教授で、近代ウクライナ史を専門としている。本職の傍ら、中央ヨーロッパ大学（CEU）の客員教授やウクライナ・カトリック大学の評議員職等を兼任しているほか、個人的な政治的発言も含めた活発な社会活動によってウクライナでも有数の精力的な歴史家として知られる。ディアスポラ史学の大家イヴァン・ルィシャク・ルドニツィキーの本国への逆輸入を率先して行ったり、さかんに欧米のフォーラム等に参加したりするなど、ウクライナ以外の地域でウクライナ史を研究する者にとって、もっとも馴染み深いウクライナ人歴史家のひとりといえる[3]。

本書『故国の預言者：フランコとその周辺（1856–1886）』は 2006 年に上梓したフリツァクの新著である。リヴィウの出身で、国立リヴィウ大学で学んだ後、同大学で学位を取得して歴史学教授の地位につき、1992 年に創設された大学付属の歴史学研究所の所長を務めるフリツァクは、これまでもリヴィウあるいはリヴィウを含めたハリチナ（ガリツィア）全体の歴史と、ハリチナ出身の作家で 19 世紀後半のナショナル・ムーヴメントの牽引役だったイヴァン・フランコ Іван Франко（1856–1916）に関心を寄せてきた[4]。本書はそれらの関心の延長にあるもので、表題どおりフランコの前半生と彼を取り巻くハリチナの社会を丹念に描いている。現在でも高い人気を誇るフランコの伝記であるだけに、研究者だけではなく広く一般にも受け入れられており、ウクライナの雑誌『コレスポンデント』が実施した「2007

---

1 *Ярослав Грицак.* Пророк у своїй вітчизні: Франко та його спільнота (1856–1886). Київ, 2006. 632 с.

2 同書については本誌第 46 号（1999 年）に光吉淑江の書評がある。光吉淑江「ヤロスラフ・フリツァーク著『ウクライナ史概略：近代ウクライナ民族の形成』」『スラヴ研究』第 46 号、1999 年、277–285 頁。

3 フリツァクは日本にも度々滞在しており、2004 年には北海道大学スラブ研究センターの冬期国際シンポジウムで口頭発表を行っている。発表の内容は同シンポジウムの関連書籍に所載。Yaroslav Hrytsak, “On Sails and Gales, and Ships Driving in Various Directions: Post-Soviet Ukraine as a Test Case for the Meso-Area Concept,” in Matsuzato Kimitaka, ed., *Emerging Meso-areas in the Former Socialist Countries: Histories Revived or Improvised?* Slavic Eurasian Studies, no. 7 (Sapporo: Slavic Research Center, 2005), pp. 42–68. また、2006 年には 21 世紀 COE プログラム外国人研究員として同センターに滞在している。

4 フリツァクはフランコに関してすでに一書をものしている。*Грицак Я.* «...Дух, що тіло рве до бою...»: Спроба політичного портрета Івана Франка. Львів, 1990.

年度最高の書籍」を選ぶ投票でもノンフィクション部門の第一位を占めている[5]。

フリツァクの歴史著作には、いくつかの際立った特徴がある。前述した歴史研究者だけではなく一般の読者、あるいは他分野の研究者の理解を得ようとしている点も特徴のひとつといえる。しかし、より際立った特徴は、旧弊な歴史研究の作法、特にソ連時代の歴史研究の作法から離れ、欧米の理論や方法論を取り入れて、意識的に欧米の歴史学とウクライナの歴史を結合させようとしている点、また、ウクライナの近代化とナショナリズムについての見解を展開しながら、その過程においてハリチナの果たした役割を追求しようとしている点である。これらの特徴は、相互に関連しあって、良くも悪しくもフリツァクの歴史記述を印象付けてきたが、本書ではそれがいっそう明確になっている。

フリツァクはまず「序文」の冒頭で、本書は「ナショナリズムに関する本」であると宣言する。そして、ただしそれは「性質とジャンルによって、これまでの類書とは異なっている」という。それは本書が、「性質からいうなら伝記」とよぶべきものであるが、「ジャンルからいうならば、ミクロストリアである」からだった。この宣言は、自身がこれまでの著作の中で取り入れてきた欧米の歴史学と、ウクライナの歴史とを結合させることによって、自身のテーマであるウクライナの近代化とナショナリズムを浮き上がらせようとする新しい試みを宣しているともいえる。しかしそうした試みの結果、冒頭での宣言に反し「ナショナリズムの本」としての側面は影をひそめ、ミクロストリアとしての側面が際立つことになっている。研究書としての本書の面白さはこの「反転」にある。

まずごく簡単に内容を紹介すると、本書は第一部「フランコと彼の時代」と第二部「フランコと彼の社会」からなっている。第一部では、第 1 章「変化に迫られた辺境の地」でフランコが生まれた 19 世紀のハリチナ、すなわちオーストリア時代（1867 年以降はオーストリア・ハンガリー帝国）のハリチナ・ウクライナの様子を描いた後、「出生の謎（第 2 章）」「幼少期（第 3 章）」「学齢期（第 4 章）」といったふうに、時を追いながらフランコ像が語られていく。ここでの特徴はフランコの人生だけではなく、彼とその故国であるハリチナの属した「時代」そのものにも大きな関心が払われていることだろう。19 世紀前半のハリチナはハプスブルク帝国に属していたが、面積はおよそ 7 万 8500 平方キロメートル。領土的には、ハリチナに続いて広大なボヘミアとティロルを合わせたほどの広さを誇る帝国内の最大地域であったが、同時に、あらゆる意味でもっとも遅れた地域でもあった。フランコは 1856 年の 8 月 27 日に、このオーストリア領ハリチナのサンビル郡（現在のドゥロホヴィチ）ナフィエヴィッチ村で生まれている。「リヴィウの歴史家」フリツァクは、これまでにも各種のシンポジウムや論文で、ハリチナやリヴィウについて語ってきたが、本書でも第 1 章で 19 世紀のハリチナの状態を詳細に描いている。

一方、後半の第二部「フランコと彼の社会」には、「フランコとその世界観（第 10 章）」、「フランコと村人（第 11 章）」、「フランコとボリスラウ（第 12 章）」「フランコと女性（第 13 章）」、「フ

5 『コレスポンデント』の「最高の書籍」は前年度に初版の出たウクライナ人作家の書籍の中から選ばれる。選出は一般読者と専門家の投票によるもので、フィクション部門とノンフィクション部門に二分されている。本書はノンフィクション部門で、人気作家の I. アンドルホヴィッチや前年度のフィクション部門で一位を占めた T. プロハシコの著書を抑えて一位となった。

ランコとユダヤ人（第 14 章）」「フランコと読者（第 15 章）」といった風に、書名（『故国の預言者』）がそのまま章題になっている第 17 章を除いて、全ての章題にフランコの名が使われている。著者は第一部においてフランコの生きた時代を描写するとき、フランコよりもむしろその背後の社会に焦点をおき、時代性を鮮明に映しだした。その上で第二部では、彼と、彼と同時代に属する社会との関わりを横軸にすえることで、フランコの伝記（フランコの歴史）が属した空間の形を定めようとしたといえる。

イヴァン・フランコの名が語られるとき、たいていの場合「シェウチェンコに次いで重要なウクライナ人作家」と表現されるが、実際フランコは様々な点でシェウチェンコと対比をなしている。1840 年に最初の詩集『コブザール』を出した「民族詩人（国民的詩人）」シェウチェンコは、詩人、作家あるいは画家であると同時に、ミコラ・コストマロウ Микола Костомаров（1817–1885）やパンテレイモン・クリシ Пантелеймон Куліш（1819–1897）らとともに結社「キリロ・メトディー団」や雑誌『オスノーヴァ』に参加し、1840 年代のナショナル・ムーヴメントに大きな影響を与えた。一方フランコも、リヴィウ大学在学中の 1875 年からミハイロ・パヴリク Михайло Павлик（1853–1915）やオスタプ・テルレツィキー Остап Терлецький（1850–1902）らとともにハリチナでのウクライナ人運動を牽引しながら著作活動を行っていく。つまり両者は、時代（世代）的にも（1840 年代の運動家と 1870–80 年代の運動家）、地域的（ドニプロ・ウクライナとハリチナ）にも異なったカテゴリーを代表しつつ、結果的にウクライナのナショナル・ムーヴメントを押し進めた作家かつ運動家であったといえる。この点、すなわち、フランコが単なるシェウチェンコに次ぐ国民的存在なのではなく、シェウチェンコとは別種のカテゴリーから生まれた国民的存在であったという点を、本書は極めて丹念に描きだしている。そして、それを可能にしているのが、著者のいうミクロストリアとしての伝記という手法である。

フランコは 19 世紀の社会運動家の例に漏れず、生涯は破綻の連続で、数度にわたる逮捕、拘留も経験している。したがって、フランコの周辺には夥しい記録と著作、さらに同時代から現代に至るまでの様々な研究書が存在している。ところがフリツァクは、マルタン・ゲール [6] やメノッキオ [7] といった、限られた史料の上にしか現れない従来のミクロストリアの主人公とは「別種のカテゴリー」に属す「マクロな人物」フランコの伝記をミクロストリアとして描いた。では、そもそもフリツァクがフランコの伝記をミクロストリアとして書こうとした意図は何なのか？ それを考える前にまず、ミクロストリアそのものについて触れておこう。

ミクロストリアは、マルクス主義史学のような、いわゆるグランドセオリーを背景とした歴史研究や、個々の事例を無名性のうちに解消して「系」として史料を構成しようとするアナール学派の「系の歴史学」に対するアンチテーゼとして注目されてきた [8]。たとえば、ミ

---

6 ナタリー・Z・デーヴィス（成瀬駒男訳）『マルタン・ゲールの帰還：16 世紀フランスの偽亭主事件』平凡社、1985 年。

7 カルロ・ギンズブルグ（杉山光信訳）『チーズとうじ虫：16 世紀の一粉挽屋の世界像』みすず書房、1984 年。

8 二宮宏之「ミクロストリア・マクロストリア」『思想』第 826 号、1993 年、1–3 頁。

クロストリアの代名詞のようになっているギンズブルグ Carlo Ginzburg が提起したのは、個々の事例のうちに認められる徴候（サイン）を手がかりにして、そこに固有の文化の構造を読み解く方法である。ギンズブルグは、ハパックス[9]は系列史では利用不可能だから無視するようにと勧めるアナール学派の歴史家フュレ Francois Furet に対し、ハパックスなどというものは理論上存在せず、あらゆる歴史資料は最も異例なものでさえ何らかの系列に入れることが可能だと反論し、どのように特異な事例でも、適切に分析されさえすれば、より広範な資料系列に光を投げかけることができると主張した[10]。いかに極端な例であろうとも、何らかの資料の系列と無縁ではないからである。この主張は、「系」として処理されてしまったときには、無名性のうちに回収されてしまうような典型的な事例であっても、実際には何らかの特殊性を有していることと表裏の関係にあった。ギンズブルグが、「さもなければ無名のままで終わったある個人に関する限定された資料を、視点を接近させて分析」したのが、代表作『チーズとうじ虫』である。彼はここで、教皇庁の命令で火刑に処されたフリウリ地方の粉挽屋メノッキオ（ドメニコ・スカンデッラ）の話を語りながら、彼の属する従属階級の文化と、それとは異質な支配階級の高級な文化との循環について論じてみせた。

ミクロストリアの代名詞ギンズブルグの意図をこのように整理してみたところで、フリツァクの意図するところに目を戻そう。メノッキオとフランコでは、属している文化が違う。一方は、いわゆる大衆文化に、他方は時代を先導する高度な知識人の文化に属している。また、それぞれが関わった、あるいは書き残した資料の量も質も違う。しかし両者には共通点もある。教皇庁の命令で火刑に処されたメノッキオも、リヴィウ大学在学中に最初の検挙を受け、後にその名が母校の名称に付されるフランコも、彼らの生きた時代や社会の構造を示す典型的な例ではないという点である。そして、典型的ではない例であっても、適切な観察を加えれば「個」に対する研究ではなく、より広範な領域の研究に貢献することができるというのが、ミクロストリアの考え方である。そう考えてみると、フリツァクの意図は明らかだろう。彼はギンズブルグとは逆に、支配階級の文化に属するフランコの話を語りながら、それとは異質な農村の社会、そして圧倒的な農村文化の中にあるハリチナ・ウクライナ全体の状況を物語っている。そして、異質な文化の存在と両者の限定的な交流を明らかにすることで、19 世紀後半のハリチナの社会とそこに属したフランコの世界観を描出することに成功している。

フリツァク自身は、フランコの伝記をミクロストリアとして書いた意図を、ナタリー・ディヴィスが書いたミクロストリアの名著『マルタン・ゲールの帰還』における主人公の親戚たちの心性と比して説明している。フランコが書いたウクライナ語の作品に関して、フランコは現実の社会を描いていないという批判は当時からあった。しかし、フランコの読者たちが彼の作品を信じたのは、マルタン・ゲールの夫（偽の夫）が帰ってきたとき、親戚たちがその男を本物だと信じたのと同じようなものだとフリツァクはいう。そして、このような状況、

9　hapax legomenon のこと。特定の資料や言語、あるいはテクストのなかに一度しか出てこない語の意。ここでは、一例しか確認できない史料のことを意図している。

10　カルロ・ギンズブルグ（竹山博英訳）「ミクロストリアとはなにか：私の知っている二、三のこと」『思想』第 826 号、1993 年、4–30 頁。

つまり安易に偽者を信じた親戚の行動を理解するには、当時の社会の価値体系や精神構造を知る必要があると彼は主張するのである。そこでフリツァクは、家族、生まれ故郷の村、勉強仲間、フランコが加わった雑誌や新聞の編集部、あるいは彼が中心的な役割を占めた非合法の集団といった「小さな社会」のなかにフランコをおいて観察しようとした。そうすることで、近代的なアイデンティティが形成されるときに、特別な存在と一般社会とが相互に関連していたことを示そうというのがフリツァクの意図であったといえる。それはちょうど、ギンズブルグがメノッキオを観察しながら、彼らの文化と高級文化との間に存在するつながりを語ったのと同じことで、それを逆の方向に向けて行っているのである。フリツァクは、膨大な作品や本人の主張を分析しても決して完全には理解されることのないフランコの性質を、作品や主張から身を離して彼の社会と対峙させた。すなわち、時代を象徴する文学作品と文学者あるいは運動家としての生涯から人物像が検証されてきたフランコの伝記を書きながら、彼に視線を集中させず、ハリチナの社会の上にそれを投影することで、シェウチェンコとは異なるフランコの英雄像を浮かび上がらせようとしたのである。その点では、フリツァクの手法は「視線を（対象に）接近させて分析した」ギンズブルグの手法とは異なっているが、執拗に伝記的事実を追わず、社会的な事象に目を向けたフリツァクの筆致は、通常の伝記とは異なって、主人公に関心のない読者にも興味深い情報を提供している。マクロな人物の大きな伝記をミクロストリアとして書くという独自の作法によって、本書は事実の追求に拘泥した古い歴史学から解放されたともいえる。

このようなミクロストリアとしての興味深い成果に比べると、著者のいう「ナショナリズムの本」としての側面には新味が見られない。ウクライナの近代を考察する段になると、フリツァクはやはり、ウクライナ全土に対するハリチナの存在、特殊性を強調しようとする。その作法は、ドニプロ・ウクライナあるいはウクライナ全体のナショナル・ムーヴメントとハリチナのそれとの交流を重視したルィシャク・ルドニツィキーの作法とかさなるものである。本書の内容が「ハリチナの英雄」フランコの伝記である以上、ある程度当然のことではある。しかし、フランコというハパックスに関する資料を伝記として描かないことで、もうひとつの主役であるハリチナの姿を際立たせたフリツァクが、ハリチナを書く段になると、途端に対象に寄り添ってしまうのでは、せっかくの効果が相殺されてしまうことになる。そもそもフリツァクは、前書『ナショナリズムへの情熱』[11]に続いて、本書もナショナリズムの本だと宣言しているが、本書で描かれているのは、ネイション意識の形成過程としての「ナショナリズム」であり、その過程を描く中で彼は、ハリチナという土地の独自性（時代性と空間性）を浮かび上がらせた。その点では、本書はルドニツィキーや著者自身がこれまでに著してきた近代ハリチナ史の、とりわけ、その知識人の心性史に新たな進展を与えたともいえる。にもかかわらず、フリツァク自身が最終的に立ち戻るのは「近代化のテーゼ」と「ナショナリズム」である。それがフリツァクにとって最大のテーマであることは理解できる。しかし、本書で意識されているナショナリズムの定義は、「ナショナリズムとは、第一義的には、政治的な単位と民族的な単位とが一致しなければならないと主張するひとつの政治的

11 *Грицак Я.* Страсті за націоналізмом. Київ, 2004.

原理である」とするゲルナーの定義である[12]。フリツァク自身はこの定義は現存するあらゆるタイプのナショナリズムに対応しうるとしているが、ミクロストリアという手法をとることで、既成の歴史学に対峙したフリツァクが、「近代化のテーゼ」と「政治原理」としてのナショナリズムといった既成の議論に戻ってしまうのでは勿体ないといわざるを得ない。また、良く知られているように、上記のゲルナーのナショナリズム定義は、フリツァクがたびたび参照するフロフのナショナリズム論、ナショナル・ムーヴメント論とは根本的に相反するものである[13]。それゆえ、フリツァクが両者のナショナリズム論の相違をどのように理解して、自論に利用しようとしているのかがやはり読者には判然としない。これまでにもフリツァクには、原理や定義といった基本的な部分で、簡略化された理論に頼る傾向があったが、本書でもその傾向が窺える。

研究書としての完成度が極めて高いだけに、最後に理論部分での発展性に疑問を呈することとなったが、このような理論部分での疑問点が目に付くのは、本書の端々にウクライナの近代化といったグランドセオリーとは無縁の一般社会の姿が現れているからでもある。これらは、のちに姿を現す「ウクライナ」というひとつのネイションの背景であると同時に、ドニプロ・ウクライナとは別種の歴史的経緯を辿ったハリチナの前景でもある。ネイションの問題を前面に置いて、ハリチナの意義を問おうとするフリツァクの意図は理解できるものの、多様な資料を駆使した詳細な描写から浮かび上がるこの風景を、近代的なネイションの背景として収斂してしまう必要があるのか、フランコの背後に浮かんだハリチナの風景が鮮明なだけに、その理論的結末の単調さが気になるのである。ナショナリズムに対する取り組み方と歴史学研究との比重をどのように処理していくかという点は、フリツァク自身が今後自らの、あるいは彼が牽引するリヴィウの近代史研究を、どの方向に進めていくかという問題とも関わってくるものであろう。だからこそ、本書に対して「ナショナリズムの本」というような小さな肩書きを付すことは、本書の真義を見損なわせ、著者の方向性を限定するに過ぎないのではないかと思えるのである。

12　Ernest Gellner, *Nations and Nationalism* (Oxford: Basil Blackwell, 1983), p. 1.

13　ゲルナーとフロフのネイション・ナショナリズム観の相違と両者の議論の展開については以下を参照。Ernest Gellner, *Encounters with Nationalism* (Oxford: Blackwell, 1994); Miroslav Hroch, *Social Preconditions of National Revival in Europe: A Comparative Analysis of the Social Composition of Patriotic Groups among the Smaller European Nations* (New York: Columbia University Press, 2000), pp. xi–xix; Miroslav Hroch and Jitka Malečková, "'Nation': A Survey of the Term in European Languages," in Athena S. Leoussi, ed., *Encyclopaedia of Nationalism* (New Brunswick: Transaction Publishers, 2001), pp. 203–208.